

ピアニストの向井山朋子、性や身体考える参加型プロジェクト

2025/5/24 5:00 | 日本経済新聞 電子版



今回のプロジェクトを企画した向井山朋子（右から2人目）ら。Joshua Hoogeboom-Noye

ピアニストでアーティストの向井山朋子が5月30日から6月8日まで、参加型のアートプロジェクト「WE ARE THE HOUSE」を開催する。京都芸術センターを中心に京都市内の各所で、女性性や身体などをテーマにしたパフォーマンス、座談会、展示などを展開。2026年3月21、22日に成果としてのパフォーマンスを予定する。

向井山はオランダ在住で、ピアニストとして世界的なオーケストラとの協演や多彩な舞台芸術を手掛ける一方、映像やインスタレーションの展示など幅広く活躍する。プロジェクトは京都芸術センター開設25周年事業で、大阪・関西万博オランダ公式プログラムの一環。向井山のほか、医師でアクティビストのレベッカ・ゴンパーツら計4人のメンバーで手がける。

31日は京都芸術センターで「BIG HOUSE PARTY」と題し、関西で活動するドラッグクイーンたちがパフォーマンスとパーティーを開く。また同センター内では、写真や思い出の品を持ち寄り自由に飾れる「みんなの祭壇」や、日本独自のトイレ用観音装置を使ったインスタレーション「乙姫ラジオ」を展示する。

妙蓮寺塔頭（たっちゅう）玉龍院で開催する「縁食堂」（6月7日）は、住職がシングルマザーやシングルファザー向けに手掛けている支援活動を体験できる。堀川団地にあるギャラリー「no.317 ANEWAL Gallery」で開かれるイベント「台所がつなく家族」（6月3、4、6日）は、子供とその祖父母が台所で料理を作りながら家庭にまつわる会話を交わす映像を鑑賞しながら、実際に参加者に料理を振る舞う。このほか「主人」「嫁」などの日本語を考える座談会「にほんご教室」、自分の身体を知って性について理解を深める「性と身体を学ぶスクール」なども予定する。

直訳で「わたしたちが家」となるプロジェクトのタイトルについて向井山は「家といえば安心できる場所だが、家をなくした人もいれば、そこが安全ではない環境にいる人もいる。私にとってハウスという言葉でまず思い浮かぶのは自分の身体だった。ハウスって何だろうというのをいろんな人と話しながら共有したいと思った」と説明する。京都のほかベルギー、オランダでも展開し、それらの成果をもとに、来年3月にピアノやエレクトリック音楽、映像などを組み合わせたパフォーマンスを計画する。

ピアニストでありながらこうした企画を打ち出すことについて「音楽で表現するとき、人に何かを伝えているという自覚はあるものの、言葉で訴えないと伝わらないというのを今頃になって気づき出した。今の社会の中で、自分の音楽をやっているだけではいけないという危機感がある」と向井山。「近くにトランスジェンダーの人がいて『どちらのトイレに入るか』を真剣に悩んでいたら、少し意識して考えるきっかけになると思う。普段から自分の中の男性性や女性性を意識することがない人々にこそ気軽に来てほしい」と力を込める。

